

聖書に親しむ

2023年 聖書週間 (11月19～26日)

テーマ：わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい(ヨハネ 15・12)

2023.11.19

カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10

TEL03-5632-4445 FAX03-5632-4465

郵便振替 00130-6-36546(宗)カトリック中央協議会一般会計口

巻頭言

愛の恵み

カトリック仙台教区司教 エドガル・ガクタン

中学生時代のある日のこと。母国（フィリピン）のわたしの町にアメリカからバスケットボールチームがやってきて、地元のチームと親善試合を行いました。試合のハーフタイム中、訪問チームの何人かが観衆に、「イエス・キリストとの出会いに恵まれるまで、いかに波乱万丈の人生を送ってきたか」を語りました。そして試合後、選手たちは聖書のみことばがいくつか記載されているチラシを配ったのです。

この日の出来事は、わたしに深い印象を残しました。カトリック学校で学び、家族と一緒にミサにも参加していたので、わたしにとって聖書は身近な書物ではありませんでした。しかし、あの日の出会いのおかげでいっそう聖書に親しむようになり、いくつかのみことばを暗記するようになりました。

聖書に親しむことにより、キリストと出会った人は、キリストを通して「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠のいのちを得るためである」(ヨハネ 3・16) という神の愛に触れていきます。罪深いわたしたちに向けられたこの神の愛は、わたしたちの心を喜びで満たし、やがて人生さえも変えていきます。イエス・キリストに出会った使徒パウロは、「わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです」(一コリント 9・16) と語ります。バスケットボールの選手たちも、自分の身に起きた神の愛とゆるしの体験が恵みによるものだと実感したからこそ、その喜びを伝えに来たのです。

わたしが若い頃から親しみを覚えた聖書の物語



は、父親が生きているうちに財産をもらって現金に換え、使い尽くして父親のところに帰ってきた有名な「放蕩息子」(ルカ 15・11 - 32) のたとえです。まだ遠く離れていた息子を迎えに行き、温かく受け容れた父親の愛とゆるしの態度に神の寛大さが表されています。しかし、この話は真の結末が見えないまま終わっています。もしかするとイエスはわたしたちに物語を終わらせることを望んでおられるのではないのでしょうか。あわれみを受けた者が、自分の兄弟にあわれみを示す者となることができるかどうか。わたしは神のあがないとゆるしの物語を更に続け、そのゆるしが実る場面を想像したくなります。——父親に雇われ、労働の大変さを経験した弟が父の家に繁栄をもたらし、さらに別の事業にも成功。弟は、兄とその家族を家に迎え、亡き父親を偲びながら食事を共にした、と。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」(ヨハネ 15・12) というイエスのことばは、この兄弟二人のために、父親が残してくれたことばのようにも聞こえてきます。

わたしたちも聖書を通して主に会い、福音の喜びを伝えながら、「放蕩息子」の続編を実践できるような弟子となれますように。

死と復活に結ばれる愛の掟

広島教区司祭 原田 豊己

聖書に親しむには、まず聖書を読むことから始めます。お勧めしたいのは、一つのまとまり（単元）として読むことです。

今年の聖書週間のテーマ（ヨハネ 15・12）を例にとってみます。

12 節：「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である」

「内容」

小枠は 13 章から 19 章、「イエスの受難物語」です。

中枠は 13 章から 17 章、イエスが弟子たちと最後の食事をとともにしたときに語った「告別説教」として有名な箇所です。この箇所は、第一部（13 章から 14 章：「弟子の足を洗う行為」とその意味）と、第二部（15 章から 17 章：「イエスはまことのぶどうの木のとえ話」とそれに続く教え）とに区分することができます。

小枠は 15 章 1 節から 17 節。つまり聖書週間のテーマは、「イエスはまことのぶどうの木」の教えのまとめとして語られています。

「共同体に与えられる愛の掟」

互いを愛する兄弟への愛は、「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネ 13・34）と、新しい掟としてすでに弟子たちに与えられていました。

旧約には、「あなたの神、主を愛しなさい」（申命記 6・5）という神への愛と、また「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」（レビ 19・18）という隣人愛の、二つの愛の掟があります。新約の「互いに愛し合う」という兄弟愛の掟は、「あなたがた」とあるように、弟子たちの共同体に向けられています。

兄弟愛とは正反対の行為を、創世記 4 章に描かれる、カインとアベルという血を分けた兄弟による殺人の物語に見ることができます。ヨハネの手紙は、この過ちに二度と陥らないようにと「互いに愛し合うこと、これがあなたがたの初めから聞いている教えだからです。カインのようになってはなりません」（一ヨハネ 3・11 - 12）と書いています。

兄弟愛は、兄弟のきずなの回復として、創世記のヨセフとその兄弟の話に見ることが出来ます。この愛は、裏切りにあったヨセフが兄弟をゆるした物語のテーマ「悪を善にかえる神」の教えに読者を導きます。

「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」（創世記 50・20）

「友のために自分の命を捨てること」

ヨハネ 15 章に見る兄弟愛の教え特徴は、「わたしがあなたがたを愛したように」が「友のために自分の命を捨てること」（同 13 節）と結ばれていることにあります。

イエスは弟子を友と呼び、その友のために十字架上で命を捨てます。友には、イエスを裏切り夜の闇に消えたイスカリオテのユダ、イエスから離反したペトロ、時間と空間を超えて現在に至るまでのわたしたち罪人すべてが含まれます。

イエスの死と復活が父なる神が御子をこの世に送った目的の完成であることは、十字架上での最後のことば「成し遂げられた」（ヨハネ 19・30）が示しているとおりです。友のために命を捨てることは、復活に結ばれるがゆえに究極の愛の姿と見る事ができるのです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ 3・16）

「追体験として」

聖書を読むときには、以下について考えることが重要です。

- ・イエスは何を語り、何を行ったのか。
- ・初代教会は、イエスの言行をどのように受け止め、語り伝えたのか。
- ・福音記者たちは、伝えられたイエスのメッセージを聖霊の働きのもとでどのように記述したのか。

このような問いをもって読むとき、人々の生き生きとした信仰を追体験できます。

21 世紀の日本に生きているわたしたちは、聖書を追体験することにより時間と空間を超えて、イエスに出会うことができるのです。

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」

大好きなみことばです。でも、少し立ち止まって考えてみます。

よく映画やドラマで恋人どうしが「愛している」と使います。英語では本当に「ラブ」ということばをよく聞きます。でも、わたしたちは普段の生活の中で「愛している」というのでしょうか。寝る前にお母さんに「愛してるよ」とキスする子どもなんかいないのではないのでしょうか。恋人どうしもしかり。「月が綺麗ですね」が「アイラブユー」の日本語訳だとしたのは夏目漱石ですが、わたしたちの周りで「愛する」というのは特殊な語になっているような気がします。

「愛」という漢語は、古くから日本に伝えられていました。ただ、仏教用語の中で「渴愛」（渴き求めるような欲望で愛する）という否定的な意味で使われていることが多いそうです。少なくとも、日本人の生活の中での用語として「愛」は存在していたわけではなさそうです。

では16世紀に渡来したキリシタンの宣教師たちは、神の「愛」・人の「愛」をどう訳していたのでしょうか。彼らの対象とした人々は決して難解な仏教語が分かる相手だけではなかったはずですが。彼らの生活の中のことばを使おうとしたはずですが。

1600年頃、ローマ字で書かれ、外国人宣教師でも読めるように工夫された一連の「キリシタン版」という印刷物があります。キリスト教の教義を解説した「どちりな・きりしたん」（キリシタンのドクトリン＝教義）という本の中に「キリスト教徒の掟は以下の二つに集約される」として「万事にこえてデウスを御大切に思ひ奉る事と、我が身を思ふ如くポロシモ（隣人）となる人を大切に思ふ事、これなり」とあります。「神を愛し、隣人を愛すること」ですね。

「愛」という抽象的なことばを「大切に」ということばに訳しています。これを読んだ時、言い知れない安心感を覚えました。「愛」することとは、神を、他の人を「大切に思う」ことに他ならない、と言わ

れたような気がしたのです。何も難しいことではありません。相手を「大切に思う」なら、相手にいいことをしてあげようと思うのが普通です。それからその人のことを忘れられないものです。「神が極みまで人を愛された」というのは「すべてを尽くして人を大切に思って、大切にしてくださっている」ということになります。そんなにわたしを大切にしてくださっている神を、わたしは忘れていないでしょうか。大切に思っていたら、その相手を信頼しているはずですが。わたしは神を信頼しているのでしょうか。

神が大切にしているわたしたちの「ポロシモ」をわたしたちも大切にしているのでしょうか。見ないふりをしていないのでしょうか。神様はわたしたちの手を使って、その人を大切に助けてあげたい、と思っ

ていらっしゃるのに。
「わたしがあなたがたを大切に思っているように、互いに大切に思い合いなさい」。キリシタンたちに響いた聖書のみことばをわたしたちも時代を超えてともに味わってみたいと思います。



わたしがあなたがたを愛したように、
互いに愛し合いなさい
(ヨハネ 十五章 十二節)

2023. 11.19 - 26

聖書週間
BIBLE WEEK

「聖書に親しむ」は
こちらからご覧いただけます カトリック中央協議会

良書のすすめと読み方

①『主は「たとえ」で語られた 1』 澤田豊成

2019年 サンパウロ 1,200円+税

「イエスは多くの喩えをもって、み言葉を語られ、喩えなしには語られなかった」(マルコ4・33～34)。月刊誌「家庭の友」に5年間にわたって連載された原稿を加筆修正したものです。神の国の神秘、神のなさりようを語られるとき、イエスは必ずと言ってよいほど「たとえ」を用いられました。なぜでしょう。



本書は福音書の中でイエスの語られた有名な「たとえ」の数々を取り上げて掘り下げ、詳しく解説することによって、そこに隠されているイエスの愛と思いに迫ります。聖書を信仰生活の拠り所とする人にとって最適な一冊と言えましょう。著者は聖パウロ修道会司祭。

②『主は「たとえ」で語られた 2』 澤田豊成

2019年 サンパウロ 1,200円+税

澤田豊成神父による「たとえ」シリーズの第二弾です。神がいつもともにいてくださること、神が「子よ、お前はいつもわたしとともにいる。わたしのものはすべてお前のものだ」(ルカ15・31)と仰ってくださることの何という喜び、何という豊かな恵みでしょう。しかしわたしたちは日々の生活の中でこの驚くべき恵みを忘れてしまいがちです。イエスの「たとえ」、それはこの喜びと恵みをわたしたちに思い起こさせ、味わわせてくれます。イエスの「たとえ」、それはわたしたちにとっての「当たり前」が、神の「当たり前ではない」ということを思い起こさせてくれる信仰の「羅針盤」なのです。



③『主は「たとえ」で語られた 3』 澤田豊成

2019年 サンパウロ 1,200円+税

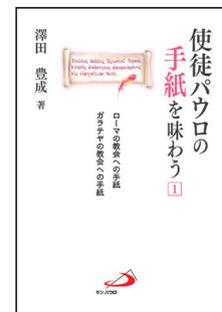
「この喩えを聞いた人々は、イエスが自分たちのことを語っておられることに気づいた」(マタイ21・45)。イエスの「たとえ」は一読しただけでは到底味わい尽くすことのできない豊かさを持ち、そしてさまざまな現実の問題に当てはめることのできる多様性を秘めています。またそうした「たとえ」が単独ではなく、複合的に融合することで、神とみ国の神秘のさまざまな側面を示してくれているのです。シリーズ最終回では、受難と死を間近にしたイエスが、「たとえ」を通して救われる人と滅びる人を暗示します。それはわたしたちに「救い」への回心の道へと緊迫感とともに迫ります。



④『使徒パウロの手紙を味わう 1』 (ローマの教会への手紙 ガラテヤの教会への手紙) 澤田豊成

2022年 サンパウロ 1,200円+税

キリスト教の世界伝播^{でんぱ}に偉大な足跡を残した「異邦人の使徒」パウロ。彼の数多くの書簡から、長さにおいても内容の点でも新約聖書に収録された全書簡の中で最も重要と位置づけられる「ローマの教会への手紙」と、「信仰による義化(または義認)」や「キリスト者の自由」、パウロの生涯や初代教会に関する極めて貴重な資料を含む「ガラテヤの教会への手紙」を取り上げます。熱烈なキリスト教の迫害者であり、後に劇的な回心によって艱難も死をも恐れぬキリストの証人となった彼のイエスへの愛と思い、信仰の神髄を、聖パウロ修道会の澤田豊成神父が丁寧に解き明かします。



◆編集後記◆

わたしたちはさまざまな機会にミサにあずかり、神の子としてのいのちを成長させていきます。ミサはことばの祭儀と感謝の祭儀によって構成されています。聖書のみことばとご聖体のうちに現存するキリストご自身は、キリスト教信仰にとって車の両輪のようなものだと言っていいでしょう。この聖書週間の間、わたしたちにとって大切ないのちの糧である聖書のみことばにより親しみ、神が望まれる背丈へと成長していきたいと思えます。

◆献金のお願い◆

この「聖書に親しむ」は無料で配布しておりますが、諸経費を含め聖書に関する活動のためにご寄付いただければ幸いです。その際は、下記へご送金くださいますようお願いいたします。

振込先： 郵便振替 00130-6-36546 (宗)カトリック中央協議会一般会計口